a.b.c. 2012 Autumn
architectural bulletin of chikurikai
築理会報2012秋号　2012年12月発行　Vol.50
東京理科大学工学部一・二部建築学科築理会事務局

平成25年築理会新年会(第5回)のご案内

築理会会員が気楽に交流できる機会を増す目的で新年会を開催してから来春で5回を数えます。

下記のとおり新年会を開催いたしますので皆様お誘いあわせのうえご出席賜りますようご案内申し上げます。

記

日　時：平成25年1月23日（水）　18：30～
場　所：PORTA神楽坂6階　理窓会倶楽部
東京都新宿区神楽坂2-6-1
参加費：3,000円

◎ご出席の方は　下記宛て平成25年1月10日（木）までに「氏名、卒業年次」をメールまたはFAXでお知らせください。

申し込み先；石神 一郎（前築理会会長）
メールによる申し込み godhopping@yahoo.co.jp
FAXによる申し込み　03-3400-1164

平成24年の新年会の模様

平成25年度　総会・懇親会のお知らせ

例年どおりであれば神楽坂キャンパスにおいて総会を開催するところですが、平成25年度は趣を大きく変えての開催となります。

平成24年度の総会・懇親会の模様

ご案内のとおり、私達が卒業した東京理科大学工学部建築学科は今年で創設50周年を迎えました。また、来春には学び舎も九段キャンパスから葛飾キャンパスに移転することとなっています。その様な状況に鑑み、平成25年度は新設間もない葛飾キャンパスにおいて総会・懇親会を開催する事といたしました。

また、工学部建築学科主催の「工学部建築学科創設50周年記念事業」に共催という形で協力することとなり、総会、講演会、懇親会等を50周年記念の事業と兼ね、以下の日程で開催することと致しました。

平成24年度の総会・懇親会の模様

記

日　時：平成25年5月18日（土）
午後1時～
（総会、講演会、懇親会等詳細日程は調整中）
場　所：東京理科大学葛飾キャンパス

工学部建築学科50周年記念事業の概要

昭和37年（1962年）春、新宿区神楽坂の地に東京理科大学工学部建築学科は産声を上げました。以来半世紀、今春50周年を迎えました。その記念としての祝賀事業が計画されています。

今夏、工学部建築学科（栗田哲主任教授）から協力要請を頂き、築理会としても要請に共催という形で応えることといたしました。現在、1部建築学科、2部建築学科及び築理会から構成される企画実行委員会及び作業部会において祝賀事業の内容が検討されています。

記念事業においては、記念誌の出版のほか、キャンパス・ツアー、記念講演、作品展示会、記念祝賀会等が計画されていますが、現在葛飾キャンパスが来春完成を目指して工事中のため細部スケジュールは調整中です。

なお、11月末現在で決定している日程等は下記のとおりです。

記

開催日　：平成25年（2013年）5月18日（土）
開催時間：13：00～19：00
開催場所：東京理科大学 葛飾キャンパス
イベント：・キャンパスツアー　・築理会総会
・講演会　・祝賀会

会員各位のご理解とご協力をお願いしますとともに、同窓生誘い合って記念事業に参加されますよう願っております。

第3回OB・OGと学生との交流会
（11月24日開催）

就職活動開始を目前に控えた11月24日、九段校舎で築理会OB・OGと現役学生との交流会が開催された。ケンチクの最前線で活躍するOB・OGが実務の最新情報を学生たちに伝えた。

11月24日、今年で第4回目となるOB・OGと学生との交流会が開催された。12月から就職活動を開始する修士1年・学部3年生を中心とした現役学生たちに、建築学科のOB・OGが建築業界の各職場のリアルな仕事内容を伝えるとともに、活発な質疑応答を行った。交流会の司会は会報委員会の安達（86年卒）が担当した。

交流会に先立ち、東京理科大学工学部建築学科作品集「りぼん」の完成を同制作委員会代表の高橋諒さんが報告した。7号目となる「りぼん」を手に、学生課題スペースの拡大、カラー化、一連のカリキュラムの説明などを収容し、学外を視野にさらに充実しつつあることをOBやOGに伝えた。

交流会に参加した卒業生は建設会社、設計事務所、ハウスメーカー、公務員といった様々な分野で活躍する18人。2009年に卒業したばかりの若手から1968年卒の大先輩まで、幅広い年代が集まった。簡単に自己紹介をしたうえで、これまでのキャリアと今の仕事、自分の勤める業界に入った場合の5年後、10年後の仕事のイメージ、望まれる人材や就活へのアドバイスについての話をした。

それぞれが、転職経験などを含めて、これまで自分が歩んできたキャリアを真摯に語りながら、就職活動に向かう学生へのアドバイスを贈った。求められる人材像については「組織にとって役立つ人、最後までやり切る人」「明るさとチームワーク。普通の答えを淡々とはっきり言える人」など、当たり前であるが忘れがちな重要なポイントが各人から語られた。

交流会に参加してくれたOB・OGたちは、以下の方々。
大岩昭之、林孝夫、石神一郎、杉田宏一、関口彰、増村清人、関川俊一、近藤剛啓、荒川圭史、森清、安達功、戸沢正美、高橋治、金林義隆、加々美友則、杉本由美子、河内悠磨、筆野望

官庁で採用担当をしている卒業生からは「面接官が見ているのは、一緒に働きたいかどうか。コミュニケーション能力に加えて、責任感、協調性、そして普通の感覚を持っているかどうかが重要」と重みのある言葉も。「向き、不向きよりも前向きかどうか」とのアドバイスもあった。

学生からも「就職活動前のこの時期に行っておいたほうがよいことはなんですか」「OBや会社訪問をする際に聞いたほうがよい質問はなんですか」など、具体的な問いかけが次々に飛んできて、やりとりは盛り上がった。

交流会の最後にはOB・OGが一人ずつ、就職活動へ向かう学生たちへの一言アドバイスを贈り、そのままアルコールを片手にしながらの懇親会、そして二次会へとなだれ込んでいった。まだまだ厳しい就職戦線だが、優秀な後輩たちは力強く自らの進路を掴み取ってくれると信じている。

（安達功＝Ⅰ部1986年卒、会報委員会）

参加した学生たちは熱心に卒業生の話に耳を傾けた

学生からの質問は「面接で注意すべき言葉遣い、印象のよくない質問はありますか」など、かなり踏み込んだものも

交流会の取りまとめを担当してくれた修士1年の米田さんの音頭で懇親会へ

懇親会では、それぞれが気になる業界の卒業生の話をたっぷりと聞いた

足寄で頑張る

今回登場頂いたのは、19 期日笠研究室卒業生の菅原智美さんです。菅原さんは現在、北海道足寄郡足寄町にある（株）外田組及びマルショウ技研（株）の代表取締役社長を務める傍ら、厳寒地における建築構法や関連部材の開発・製造、そして新エネルギーの開発、システムの設計・製造・販売等々にも活動範囲を広げて足寄町、道東のみならず北海道狭しと駆け巡り活躍されております。

築理会の皆様、足寄から菅原です。田舎で小さな事業を営んでいますので、「場違いかな？」と躊躇いもありましたが、たまにはとの思いで地方の零細企業発の様子を提供致します。私は 1984 年に卒業後、東京で森ビル（株）に勤務致しましたが、故郷である北海道十勝で子育てをしたいという思いもあり、また、家内の実家が建設業であるという縁もあって北海道の足寄町にある（株）外田組へ就職しました。

足寄町といっても皆様にはなじみが薄いものと存じます。我が町は、道東内陸部の中心都市帯広から北東へ約 60km に位置し、約 1,400km^2 の面積を持ち（香川県 1,876km^2）、2005 年までは日本で一番広い面積を持つ市町村でした。この広さに人口は約 7,600 人、人口密度は 5.4 人 /km^2（東京は 5900 人 /km^2）です。町内で飼われている牛は約 3 万頭と人口の 4 倍です。主な産業はこの牛の飼育が中心で、その他畑作と林業も盛んです。気候は内陸性で冬でも晴天の日が多い反面、放射冷却現象で冷え込みも厳しく、昨冬も最低気温マイナス 25.6 度を記録しました。しかし、足寄というとやはり、少々懐かしいですが“歌手 松山千春”の出身地というイメージが強いのでしょうか。

“凍結深度”120cm という場所柄ゆえ、建築においては積雪はもちろん、すがもれや結露の防止、熱損失を小さくするなどの寒さ対策に設計・施工上細心の配慮が求められます。この厳寒地に根ざした日頃の建設業の他、マルショウ技研では種々の断熱二重煙筒を開発して特許などを取得し、国、道関係施設及び民間住宅にも数多く設置してきています。

役場庁舎全景

役場事務室内

10 年ほど前から力を入れているのが、厳寒地であるため極めて消費が多い民生用のエネルギーにおける木質バイオマス資源の有効活用です。広い町域の 8 割を山林が覆うため林業も盛んですから、地域森林資源を利活用した木質ペレットの製造や森林資源の循環システムに関する研究を進め、木質ペレットを燃料とするストーブの普及にも努めてきています。平成 18 年に当社が施工を請け負った足寄町役場庁舎は、地元の町有林のカラマツを活用した木造ラーメン構造(一部RC造、3,508m^2）とし、大型木質ボイラを導入・設置しています。同時期にはNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）から「太陽熱木質系材料乾燥装置」の研究開発業務委託も受け、道東に止まらず道内全域、全国普及を目指し頑張っています。皆様も新たなエネルギーの一つとして是非木質ペレットに注目して下さい。

大学卒業後 30 年が経ち、その間建設業に携わりながら、地域振興や地域に根ざした新たな分野の活動にも邁進してきました。今後も引き続き、エネルギーも食も地産地消でき、人も牛もゆとりをもって暮らせる大地の道東であるよう頑張りたいと思います。本文をきっかけに北海道で理大卒業生の輪や新たな繋がりの世界が開ければと願う次第です。

〔編集委員後記〕私が菅原さんとお会いしたのは、今から20年ほど前です。私が帯広勤務となった時に足寄町において行う建築工事を発注した際、偶然菅原さんの会社が受注され、小さな町の一つの工事の中で、数少ない理科大建築科の卒業生同士が出会いました。それから13年後、私が札幌に勤務することとなると、菅原さんが足寄から遠路（陸路360km、本当に遠いんです。でも車で4時間程度？）遙々お見えになりました。北海道庁にも度々活動の一環で来られており、私の所にもお寄り頂いたようですが、兎に角札幌に見えてもあちらこちらの機関、企業さんを回られているとのことでした。

エネルギー危機や化石燃料の枯渇が話題に上る昨今、菅原さんの諸々の活動が地域振興のみならず、厳しい我が国のエネルギー事情の中に新たな活路を切り開いてくれればと願う次第です。ますますのご発展、ご活躍を祈念申し上げます。

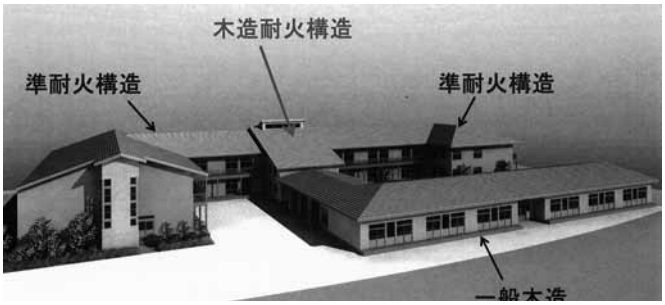
（荒井眞一郎）

木造耐火建築物の近況

飯山道久（Ⅰ部1974卒）
（社）日本木造住宅産業協会

建築基準法性能規定化（2000年改正）で、木造耐火建築物の可能性が出て来た。（社）日本木造住宅産業協会（以下木住協と略）では、主要構造部を耐火大臣認定仕様とする木造耐火建築物実現の活動をして来た。「耐火構造」は火事があって消防活動がなくとも鎮火後建ち続けていることを要求される。それ故に1時間耐火性能評価試験は、ISO834標準加熱曲線にそって1時間で約950℃まで炉内温度を上げ、その後3時間以上放置で、柱・はり等に少しでも炭化があるとその仕様は不合格（非損傷性でアウト）となる。外壁のように表裏非対称な部位は各面から2体ずつ計4体の合格が必要で、断熱材有無や一部でも層構成が違えばそれはまた別の認定（別の試験）となる。指定

春日部ふれあいキューブ



小学校設計事例（延べ面積6,067.9㎡）

性能評価機関の試験炉の空きがなく、認定取得が数年掛りになることもある。現在、計43件の認定を取得している。

2006年末から使用開始し、大臣認定書（写し）を昨年度は241件（前年比171%）を発行、累計では30都道府県・700件以上になっている。壁や床等が1時間耐火構造になるので、最上階から4層以内であれば、規模・用途・地域の制限なく何でも建築可能。実例は東京都の防火地域に建つ戸建住宅が多いが、最近は老人福祉施設や共同住宅、庁舎等にも利用され出している。建築確認済報告600件余りの中で、延べ面積500㎡以上が約1割、階数4以上も8件になっている。

＜実例紹介＞実例やその関係者の感想等を紹介する。

■S造から木造耐火に設計変更した2階建700㎡程の診療所。8月に基礎工事をして、10月には医療機器も据えて引渡し完了。「確認期間や工期も短縮」「コストも削減」「基礎が簡略化し基礎屋さんに頼めた、土台から上も大工さんの仕事範囲が広い等で、S造に比べて多数の職種を手配・監督する必要がなく、設計意図徹底も容易」等の感想も聞かれた。木造関係者では当たり前のことを利点として再認識させられた。

■老人ホームも延べ面積2,000～5,000㎡程のものが増えている。使用開始1年の秋田の事例では、近隣に最近建てたRC造の同様施設と比較して「断熱性がいい」「結露がない」「変な臭いもない」との事業者の好評が聞かれた。岡山の事例でも「床の感触がいい」「遮音性も利用者の不満はない。○○さんが転んだのではないか等、気配が感じられる」との評もあった。

■春日部の庁舎「ふれあいキューブ」、延べ面積約10,500㎡で、4階までS造耐火で5・6階が木造耐火。5・6階はロの字形プランで、外周と中庭に面した部分のカーテンウォールに市松状にLVL耐力壁が設けられている。入場自由なので内部も見学可能。

＜今後の活動＞

木住協では、設計・施工の合理性を上げる為、追加の大臣認定取得も続けており、最近木材外装の外壁認定も取得した。公共建築物等木材利用促進法の2010年施行を受けて、中大規模の設計事例集を発行するなど、耐火構造に限らず、木造建築物増加を狙った活動をしている。一部を木造耐火構造として、別棟扱いできる残り部分をより木質感が出せる一般木造や準耐火構造とする6,000㎡超の小学校や、長さ6m以下・通常断面の木材のみを用いた10m×20mの無柱空間木造コンビニ等の試設計もしている。

木造耐火建築物普及にご協力ください。耐火設計マニュアル講習会他、木住協活動は、次の木住協ＨＰをご参照ください。

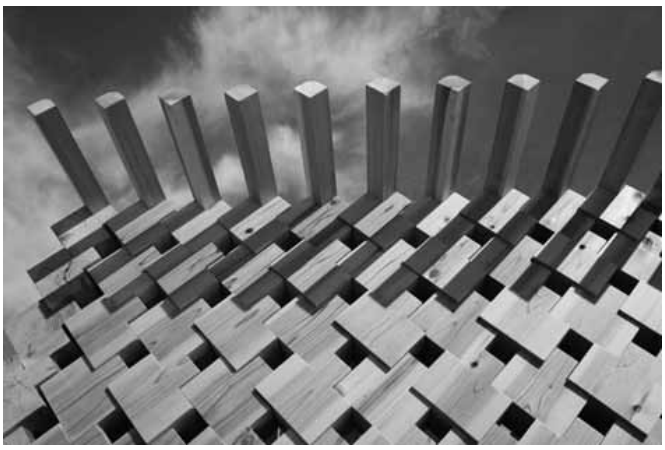
http://www.mokujukyo.or.jp

森の茶室

片山美保（Ｉ部修士１年生）

平成24年10月6、7日に「癒しの環境研究会第12回和歌山全国大会」が和歌山県立医大で開催された。この大会に合わせ、和歌山市出身の建築家で東京理科大非常勤講師の広谷純弘により、紀州材を使用した「森の茶室」が製作された。

この茶室は15センチ角の紀州の杉材ブロック約600個を積み上げ、2m×3m、高さ2.5mもの大きさになる。壁には規則的に穴が並び、隙間から入る光を森の木漏れ日に重ね「森の茶室」と名付けられた。



このブロックは富山県で毎年開催されている、LIVING　ART in OHYAMAで開催されるアートマーケットの為に私達、理科大の学生が平成23年に考案したものが作り替えられている。私たちは参加した大学で唯一の建築学科だったので、ただ商品を製作するのではなく、買手が想像し違うものに作り替えられるような物を作りたいと考え、子供が手にとって遊ぶ為の小さな積み木ブロックを作った。これを参考に、広谷先生の設計によって､積み木が実際に人が入れるサイズの「森の茶室」へと生まれ変わった。

「森の茶室」を作るにあたり、紀州材のPRを目的に、和歌山木材協同組合も協力し、組み立てが行われた。かかった時間はおよそ4時間。理科大の学生と製作に携わった堺弘幸さん、木材協同組合の会員、広谷先生により作業が行われた。

大会当日は、同医大の茶道部の方々によってお茶が振る舞われ、多くの人が、抹茶と和菓子と共に「森の茶室」内でのひとときを楽しんだ。

大会終了後には、組立に携わった人達によって惜しみながら解体が行われた。ブロックは何度も組み立てては解体することが可能であり、その後10月13・14日に和歌山市の和歌山ビッグホエールで開催された、わかやま商工まつりの木材工業部会のブースにも展示された。

広谷先生は「木は人にとって一番身近な素材。木の香りやぬくもりで安らいでもらえたら」と話していた。実際、展示期間中にブロックに鼻を近づけ、香りを楽しむ人の姿が見られた。

私達学生は、このプロジェクトに携わったこと

で貴重な体験をすることができた。木材の香りや質感に実際に触れ、この茶室の製作を通して人との交流を深めながら多くを学ぶことができた。机に向かうだけではわからない、広谷先生の言う「香り」や「ぬくもり」を念頭に置き、今後の活動に取り組みたい。

Living Art in OHYAMA 2012を振り返って
～モノを作るということ～

坂下淳一（II部４年生）

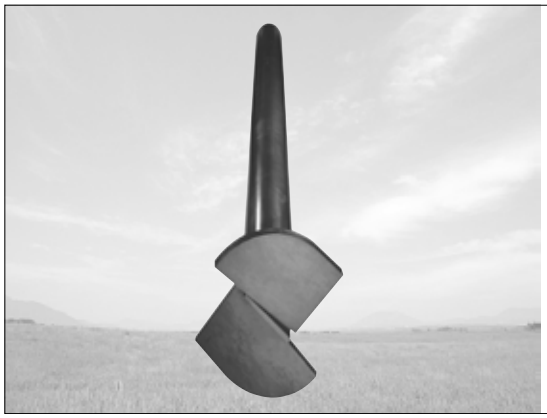
５月から準備を始め、８月末まで約３か月間を費やしたコンペで、私自身大学４年になって初めてのコンペでした。子供の絵をもとに作品を作り上げるコンペで、武蔵野美術大学と富山大学の学生との３大学の参加のもと行われました。私は高校から建築を学んできましたが、このコンペで多くのことを学び、体験することができました。

課題で住宅から小学校や商業施設など設計を行う中で、図面や模型を作ってきましたが、どれも1/100や1/200などの尺度のもので、詳細部については表現できませんでした。しかしこのコンペで作るのは1/1の尺度の実物であり、また手に収まる大きさのものであったので、細かい収まりや意匠が全体の構成に直接影響を与えるものでした。そしてこのコンペは、子供が描いたスケッチがもとにあるので、その子が「この作品を実際にどう使うか」というところまで考えて作ることで、人に対してモノを作ることの難しさを体感しました。そうした‘実物がもつ力’というものを初めて実感しました。

私は今まで‘モノを作る’ことに関して俯瞰的にしか考えられていなかったのだと思います。しかし、今回のこのコンペを通じて、使う側の人間を考え、使う時のストーリーを想像しながら、細かいところまで作り込むこと、思いを込めることが感動を生む作品を作るために重要なことだと感じました。そしてモノづくりはこの思いがあってこそ初めて成立するものだと思いました。

今年は東京理科大学のコンペ参加者は全員受賞し、大賞も受賞することができました。それぞれがモノづくりに正面から向き合い、それぞれの答えを表現できたからこそ、このような結果を頂くことができたのだと思います。

またコンペは富山県大山地区で行われ、大自然を感じるとともに、普段はあまり関わる機会のない武蔵野美術大学と富山大学の学生とも交流を深めることができ、多くの経験をすることができたコンペでした。



目に見えない支える技術こそが大切だと考える。

回転貫入鋼管杭ジー・エクス・パイル
G-ECS PILE®
http://www.sansei-inc.co.jp
営業品目：建築工事における基礎杭の開発・販売・施工/建築工事における各種杭の技術提案
※ 技術開発スタッフ募集中

株式会社 三誠
SANSEI INC.
本　社　東京都中央区日本橋箱崎町4番3号　国際箱崎ビル3階　TEL:03-3639-5226　FAX:03-3639-8162
関西営業所 / 北関東営業所 / 新潟営業所 / 東北営業所 / 茨城営業所
（昭和48年　工学部建築学科　代表取締役　三輪富成・専務取締役　小川ひろし　他2名）

山名研究室 10 周年

2002 年に研究室をスタートさせてから、今年で 10 年を迎えることができました。この場をお借りして、その間お世話になった皆様に感謝を申し上げたいと思います。

第二部建築学科の沖塩先生後任の志水先生が駒沢女子大学に移動されたことに伴い、急遽 2002 年 3 月末に帰国、4 月着任という慌ただしいスケジュールのなかで母校での「新」生活を 35 歳から再開させました。この状況から初年度は講義演習のほか、第二部の卒業設計の学生だけを指導するというスロースタートを許してもらいました。

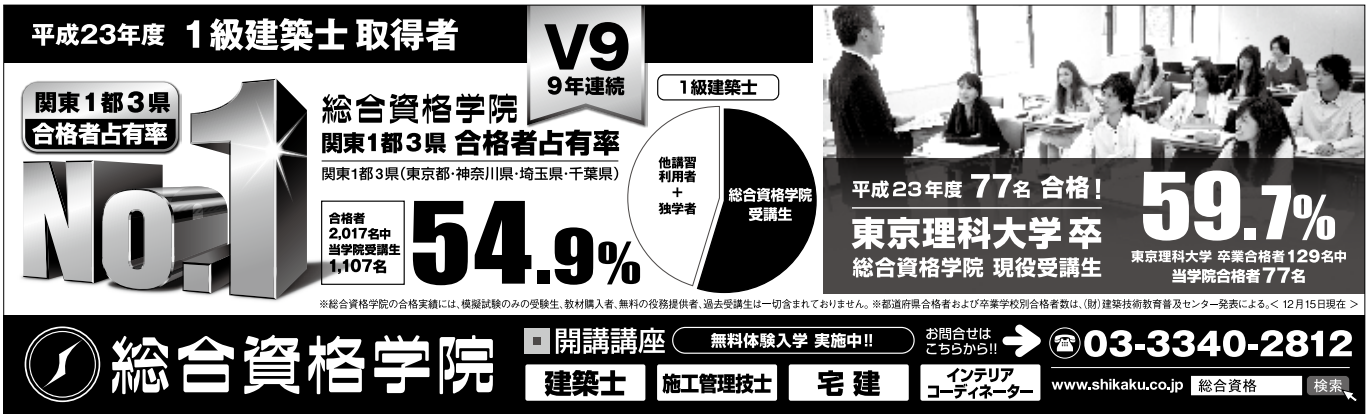
2 年目から第一部から卒研生が 3 ～ 5 名、第二部から卒研生 8 名前後、卒業設計生 18 ～ 24 名が配属され、3 年目からはその中から 4 ～ 6 名が修士課程に進学しました。四年目から一昨年度までは、所属学生が 40 名を超える状態が続いていましたが、一昨年度から直井先生の後任に坂牛先生が第二部の意匠系教員として着任したことにより、卒業設計の学生を二研究室で分担することになりやっと大部屋状態を脱することが出来ました。このような状態でしたので、10 年間で既に 300 名近い卒業生を送り出したことになります。

人数は大部屋でしたが建築学科で最少面積の研究室で何とか運営してきました。神楽坂校舎の 9 号館 11 階にあったころは 30 ㎡弱、九段校舎 5 階北棟に移ってからも 50 ㎡に満たない研究室のなかで工夫をしながら、学生には苦労を掛けながらやりくりしてきました。とはいえ、卒業設計の学生を製図準備室の助手、助教の先生と連携できたことは何よりもの助けになりました。歴代の製図準備室の塚田幹夫助手(-2003 年度．現・管財課)、菊地宏助手（2004 - 2006．現・武蔵野美術大学准教授)、三戸淳助教（2007 - 2010．現・ココアデザイン代表)、呉鴻逸助教（2011 - ）の存在なしには研究室、学科運営はできない状態でした。

研究としては 20 世紀建築を対象としながら、その設計過程に関する研究やその文化財的価値に関しての研究を行ってきました。研究室の学生たちと調査を行い、報告書をまとめた熱海日向別邸、国立西洋美術館などは重要文化財に指定され、国際組織である DOCOMOMO、ICOMOS と連携しながら 20 世紀建築の保全や保護などの国際指針を作り上げることもできました。六か国政府による国際連携で行っている、ル・コルビュジエ作品の世界遺産登録という新しい枠組み作りにも専門家委員として取組みながら、そのための基盤研究を学生たちと行ってきました。10 年の間に、研究室の学生たちと上記の内容にも絡む大小の展覧会を 10 前後、他大学と協同でまとめ多くの方々に展覧会を通して 20 世紀建築の文化財的価値について理解してもらいました。このような学生との活動は中野補手(2002)、伊藤啓二補手（2003 － 2004、現・伊藤木材設計室代表)、谷川大輔助教（2005 - 2008、現・近畿大学専任講師)、熊谷亮平助教（2009 - 2011、現・東京理科大専任講師)、鏡壮太郎学振特別研究員（2009、現・UAA 代表)、戸田譲特別研究員（2010、現・金沢工業大学専任講師）らの優秀な研究スタッフに恵まれたこと、そして科学技術研究費（代表 3 本など)、民間研究費等の研究支援があったからこそ実現できました。

2012 年 10 月 27 日午後、研究室開設 10 周年を記念して OB・OG 会を、研究室アシスタント金子祐介さんを中心とした現役学生の準備により開催しました。当日はお世話になった多くの非常勤講師の先生方、懐かしい卒業生の 100 人以上の顔に囲まれて楽しい時間を過ごすことができました。今年から毎年 10 月末土曜日に OB・OG 会を開催するために、現在、研究室卒業生名簿の充実を行っています。是非、この記事を見た山名研関係者は Facebook「東京理科大学山名研究室」に参加してください。(山名善之／ 45 歳　記)

atelieryamana@hotmail.co.jp　山名善之宛まで



東京理科大学ホームカミングデー 2012 in 神楽坂
10月28日（日）大勢の来場者がライヴ・イベントを楽しむ

盛り上がったイベントの陰に大勢の同窓・教職員・学生の運営参加が

神楽坂「神楽連の阿波踊り」3歳から70歳まで

今年の神楽坂キャンパスは1号館前まで芝生が青々と広がり、キャンパスらしさを一段と醸し出している。一週間前からの天気予報は雨を暗示していたが、同窓、その家族、友人、教職員、近隣住民、その他大学のファンで、朝から受付が大賑わいであった。来場者は終日で4000人を超えた。これは、昨年並みかもしくはそれを超えるものである。7回目を迎え、年々、ホームカミングデーが認知されるようになったことと、運営に係る同窓、教職員、学生のみなさんの継続した努力のたまものです。ホームカミングデーは4月から準備がはじめられ、2週間に一回の割合で準備会議（企画実行部会）が開催され、数十名の企画実行部会員が出席している。そこに連動する各担当部会はそれぞれのイベントを盛り上げる創意工夫を加えながら準備を進めた。大学職員の参加が例年にも増して多く、運営の事前準備、当日の運営に大きく貢献した。当日運営の参加者は1100名に達した。

ＯＢバンド加茂フミヨシ

歌姫　祥子

理事長学長理窓会長こうよう会そろって歓迎セレモニー

築理会からも15名がご参加いただきました。

祭典らしく楽しいイベントが盛りだくさん

記念講演には、武見敬三氏、馬場錬成氏、秋山仁氏の3氏を迎え、各界で活躍する先生方の講演に満席の盛況だった。ふれあいライブステージはキャンパス前庭の広場にステージを設け、テーブル席でゆっくりと楽しんでいただく趣向です。皆さん、飲んだり食べたり、楽しい時間を過ごしていただきました。今年は初めて、神楽坂商店会から神楽連が阿波踊りで大勢参加していただきました。OBバンドで、佐藤修弘TRIO&MAINA、と加茂フミヨシが、歌手で祥子が、そしてOB混声合唱団と多彩な顔ぶれに出演していただきました。大学部会からGASSES、神楽坂吹奏楽団、ジャグリング部が出演し、会場を盛りあげた。その他、多彩なイベントが多数です。

50周年記念祝賀会　20・30・40懇親会

平成24年会費納入のお願い

現在、平成24年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費　3,500円
加入者名　築理会
口座番号　郵便局　00110－5－171952

未来の科学者目指して、サイエンス夢工房

同窓同志で、家族と友達と花よりビール

東京理科大キャラが定着

理科大ジャグリング部の妙技

「編集後記」

今号は、卒業生から現役学生まで、各地・各分野で活躍する同窓生の様子をご紹介できました。足寄で走り回る菅原さん、木造耐火に取り組む飯山さん、学外のイベントやコンペでの活躍の様子をリポートしてくれた片山さん、坂下さん。取り組みに共通するキーワードは「環境」「エネルギー」「木造」、そして「地方」でしょうか。工学部建築学科創設から50年、時代の変化を感じます。

（安達功＝ adachi@nikkeibp.co.jp）

築理会報 2012 秋号

2012年12月発行　Vol.50

発行所　：東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部一・二部建築学科
築理会事務局　会員問合せ　chikurikai@gmail.com
FAX　03-5213-0976

編集長　：安達　功

編集委員：石神一郎、大岩昭之、野田正治、藤森正純、荒井眞一郎、広谷純弘、増村清人、森清、伊藤学、松浦隆幸、山名善之、平賀一浩、栢木まどか、深野有紀、大槻尚美、野村奈菜子

印刷発送：中桜印刷株式会社